二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

武闘少女姫 桜輝 sakuraki

小説 大熊狸喜
挿絵 SHIUN

プロローグ　格闘少女姫　桜輝　006
第一章　バタバタ姫　015
第二章　地下の世界へ　031
第三章　お姉さん姫と子供達　079
第四章　武闘少女姫　散華　093
第五章　御前料理大会　139
第六章　淫らな指先　156
第七章　永遠の淫獄迷宮へ　192
エピローグ　花の命　242

登場人物紹介

Characters

桜輝（さくらき）

国民の多くから慕われている、ピスルーニ王国の姫。実は格闘技が趣味で、レオタード衣装に身を包んでこっそり格闘大会に出場している。小柄な身体ながらスタイルは良い。

スピット

西方の国から来たヤミ商人。桜輝を自分の奴隷に堕とし、ピスルーニ王国の経済を操ろうとしている。桜輝を騙し、地下格闘大会に出場させた。

ダリヤ

桜輝が地下格闘大会で対戦する姉弟の姉。紅いボンデージ風の衣装を着ている快楽主義者。

コルト

桜輝が地下格闘大会で対戦する姉弟の弟。タキシードを着ている。

『第二章　地下の世界へ』より

全身を撫でられながら、少女姫の耳に背後の男の唇が触れた。
「全ての女は、生まれながらにしてその身の奥に底なし沼を秘めています。まずは姫様の沼を目覚めさせ、地獄に変えます。女の快楽という、底なしの地獄に」
「うぅっっ……そ、底なし、沼？　……あくっ」
「まぁ、私にお任せ下さい、今まで何人もの女性を堕としてきましたから……姫様の知らない姫様を、たっぷりと教えて差し上げますよ」
後ろからカクンとヒザを折られると、少女は武闘台にヒザ立ちにされた。
男のあぐら座りの上に両脚開きで座らされ、力の入らない足を真横に開けさせられて、閉じる事も立ち上がる事もできなくされる。恥ずかしい開脚姿勢なのに、なぜかお腹の奥がキュッとなり、顔中が真っ赤に上気して、額にはパァッと汗が溢れる。
（い、いや……恥ずかしい、のに…！　身体が、あつい……）
メイド達の話から、殿方と肌を触れ合う喜びについては何となく空想はしていた。拳を合わせる喜びとは何か違うみたい、とか。
しかしそれだって、いつか自分の夫となって国を治めるたった一人の愛する殿方に教えてもらう事であって、それが愛する人に染められる女の喜びだと、メイド達は話してくれた。
今身体中を包み込む甘い痺れは、どうやっても振り払えない。もしこの感覚が、みんな

のいう「性の喜び」だとしたら。そしてそれが、望まぬ男の手で身体中に教え込まれてしまったとしたら――。

少女姫の頭が恐怖で一杯になる。

「お、お離し、なさい…！　こんな、はふぅっ……ん！」

突然目の前が真っ暗になって、何が起こったのか格闘少女には解らなかった。

男の左手に下腹部をさすられながら、右手に頬を操られて、少女姫は背後から突然唇を奪われたのだ。

「……」

初めての経験に、一瞬思考が停止する。

「…んんんっっ⁉　んんんんん～～～～～‼」

目の前の景色や唇の感触が意識の中に入ってきて、姫は強く衝撃を受けていた。将来いつか、国を治める王となるたった一人の殿方だけに捧げるはずだった唇。その唇を、戦いの中で対戦者の男に、しかも公衆の面前で奪われてしまったのだ。

大きく開いた格闘少女の背中に、怒りと嫌悪の混じった鳥肌がプツプツと浮き上がる。

「んぷっ！　んむむっっ！」

（いっ、いやぁっ！　いやあぁっっ‼）

逃れようと藻掻く少女は、更に強く抱きしめられて、顎を押さえられて深く唇を割られ

た。男の舌がぬめる生き物の様に、姫の口内を隅々まで舐め回す。
上下の歯を裏表丹念に舐め取られ、顎の窪みや舌の根本までも蹂躙される。
「んんっ……！　んぱ……いっ！　いきなりこんな……なんて、アレな――んん……!!」
不埒という言葉がとっさに出てこない程、動転する少女姫。藻掻く頭を尚も押さえつけられ、深く隙間なく唇を合わせさせられた。
熱を帯びた侵入者に舌をさらわれ強く吸い出されると、男の口の中で少女の舌が甘噛みされる。柑橘系の香りのする唾液を流し込まれると、喉が勝手にコクンと呑み込んだ。
口の中から喉の奥、頭の中までもが、新たな熱で灼かれていく。まさしく淫熱である。
（いっ……いやぁ…！）
羞恥に潤んだ少女姫の瞳が閉じられ、両腕の力が失われそうになる。それでも少女は抵抗しようと、必死に男の腕を振りほどくために力を込めた。
長々と続けられる深い接吻に、ツンと形のいい少女の鼻孔から不規則な荒い息が溢れる。男の右手が添えられた首輪からは止めどなく淫熱が流れ込み続けて、首筋はジットリと汗をかく。姫自身の闘気が、熱い淫気へと変えられていく。
隻眼闘士の肩に身を預け、覆い被される様に唇を塞がれながら、格闘少女は脱力しそうな全身に愛撫を受け続けた。
「ふふ……愛おしい顔になりましたね、お姫様」

唇を解放されると、少女の涙目は途端に、羞恥と怒りが混ざった炎の色を見せる。
「つ、強い、格闘家なのだと、思って、いましたのに……あなたを、見損ないました、スピットさん…！」
「あはは、そんな真っ直ぐの綺麗な瞳で見つめられたら、大抵の男は勘違いをしてしまうでしょう。罪な少女ですね、サクラキ姫様は」
少女姫の必死で真剣な物言いも、男にとっては心地のいい音楽か何かの様だ。軽くいなされ、腰で留められた帯状の薄布に男の手が伸ばされた。
「くぅっ、な、何を……！」
不埒な手を止めようと、不自由な腕で必死に男の腕を掴むものの、少女の腕力ではやはり抵抗にすらならない。金髪男の器用な片手で結び目を解かれてしまうと、あっという間に腰布を奪われてしまい、その瞬間会場中がオォッと声を上げた。
タイツに包まれた格闘少女の、均整のとれた可愛らしい肢体が、余すところなく現れる。腰布がなくなってみると、タイツの股布は腰骨辺りまで切れ上がっていて意外と大胆だと意識してしまう。
フックリとした薄いお腹の膨らみや健康的に張った腰、するりと伸びる引き締まった腿など、布一枚なくなっただけで、その存在感が強くなった。
しかもお尻に至っては切れ上がるどころか、柔らかく揺れる尻頬のほとんどが露出して

しまっている。姫自身は動きやすさを優先して選んだ衣装ではあっても、他人の目には「姫様の意外と大胆な姿」としか映らない。
（あぁぁ……や、やだ…！）
思わず顔を逸らしてしまう。腰布一枚失うだけで、なぜか隠すものを全て奪われて裸にされてしまった様な錯覚を覚え、少女の身体は恥ずかしさに震えた。
「みんなが見てますよ、まさしく注目の的ですね」
「お、お黙り、な――ぅくっ、ぅふぅっ！」
二本の指で左右から股布を挟まれ、キュゥッと引っ張り上げられた。布が食い込み、腰がヒクンと痙攣する程、柔肉全体に強い刺激が与えられる。
引っ張られた薄布に股間の形を浮き彫りにされて、食い込んだ布に包皮をめくられ、小さな肉芽までもがキリキリと締め上げられた。
左右の裾に絞られるように挟まれた媚肉の丘が、中央を走る深い割れ目と上端で突起する媚肉核の形を布の上にクッキリと現す。自然に溢れ出してしまいそうな恥声を、少女は歯を食いしばって耐えた。
（――っ……あ、熱い…あそこ……んぅっ！）
媚肉で生まれた甘い刺激が、頭とお腹をじゅくじゅくと痺れさせる。まなじりが下がり、薄目になって、恥ずかしい責めから逃れたい一心で身を踊らせる格闘少女。噴き出す汗が

珠の様になって、上気した肌を滑り落ちていく。
「たっぷりと汗をかいて……姫様はお身体でも民の目を楽しませるのですね、実に民思いな、お優しいお姫様だ」
「え……？　あぁっ！　タ、タイツが…⁉」
何を言っているのか解らなかったが、男の視線を見て少女は気がついた。流れた汗をタイツが吸い込み、紫色の布がその下の肌色をうっすらと透けさせ始めていたのだ。
豊乳を押し包む布がはっきりと、羞恥で桜に染まる程上気した肌の色を映している。双つの柔乳の先端では、ツンと硬化した朱の媚突が自身の形までも現す。布に引かれた股間も食い込んだ溝を残して、左右の柔らかい媚肉の土手を明るい桜色で透けさせている。
「な、なぜ…⁉　今までこんな事、なかったのに――ひぅ……っ‼」
媚乳を包む極薄の透けた布が、男の爪で小さく摘まれ強く引っ張られた。長く伸ばされた薄布から小さく、チチ、チチチ、と不気味な音が聞こえてくる。
（……な、何…この音……？）
男の爪から離された瞬間、パチンと弾けて肌に張り付いた透けたタイツには、小さな穴がいくつも空けられていた。
「…！　あ、穴が⁉　こんな……！」
「まあ、元々女闘士を手なずけるための首輪ですからね、装着者の気を衣装に浴びせて、

着ている服を安紙の様に破きやすくする力もあるのです」
「な、なぜ……そんな、こと――ぁぅぅっ！」
男のあぐら腰と自身のお尻の間に両手首を挟まれる。身体を反らされ、ヒジを締められると自身の体重も手伝って、格闘姫は完全に両腕を拘束されてしまった。
「一度に全て破壊したりせず……あえて恥辱を与えるために、いちいち衣装を破けやすくする。どれ程心身を鍛えた女闘士でも、これでは恥ずかしくてたまらないでしょう？」
「なんと……破廉恥な……うくくっっ！」
背後からの両掌が姫の豊かな双乳に覆い被されて、大きく円を描くように、強く、ゆっくりと、優しく揉み上げられる。乳房をたっぷりとこね回される度に、伸ばされたタイツの小穴がチリチリと広げられて、衣装の胸回りにも新たな穴が空けられていく。
「あ、穴――はふっ……服が……あんぅっっ!!」
汗を吸った布地が縮むのも手伝って、衣装の面積を減らされながら、豊かな柔胸の露出面積が広げられていく。
「くん…！　い、いい加減に……して、くださ――はうぅっっ！」
もはや嫌悪さえ感じ始めている男の掌で、好き勝手に胸を弄ばれている。みんなに見られて、恥ずかしくて、泣き出しそうな程悔しくて仕方がない。それなのに、身体は熱く蕩け、意識は熱に浮かされて、男のされるままになっている。

（い…いや、なのに……どうして、わたくしの、からだ……）
首輪に気を乱されたとしても、今や身体の奥深くで新たに生まれた熱の方が、遥かに熱くて淫らな様に感じられる。それが何よりも悔しい。
「もう少し、皆さんにも楽しんでいただきましょうか」
「え……きゃうっっ‼」
男の言葉が少女の耳に届いた瞬間、胸の先端をそっと摘まれる。大きくゆっくりと、円を描くように、乳首だけで乳房全体を揉み回された。
「ふぅ……む、胸……離して……っっ！」
媚肉を引かれる鋭い痺れに身体を貫かれると、周りから「おおぉぉっ」というどよめきと歓声が聞こえて来る。
「…？　あぁっっ！　こっ、こんなに……穴が‼」
格闘少女のぼやけた視界に、露出が広げられていく双つの小山が飛び込んで来た。ふるふると揺れる温かい柔肉の動きや重みで、弱った布がピチ、ピチリ、と破かれていく。
胸を覆っていた布は穴が空けられ広げられ、細紐のようになって各穴から柔胸を絞り出し、尚もムッチリと食い込んでいく。
（む、胸……食い込んで…！）
「見ろ！　お姫様のおっぱいだぜ！」

「すげぇ、真っ白だな」
双山の麓から頂点に向かって、絞り上げられる様に、にゅるり、と指が滑る。まるで、新鮮なのに柔らかい白桃の様な少女姫の美柔乳。初めて目にする愛らしい姫様の豊かな乳房に、会場中が感激と興奮に満たされる。
「やっ――くふっ…！」
未だ布の下に隠れている乳首同士を布ごと擦り合わされたり、硬くされたまま柔乳に押し込まれたりと、媚突への執拗な愛撫が繰り返される。その度にお腹の奥が、更なる淫熱を帯びていく。
「どうですか、お姫様？　子宮が熱くてたまらないでしょう。まさしく、女の沼の源泉ですよ」
「し、痴れ言を…！　ぅむくっっ――っ」
男の言葉はそれでも、強がる姫の心をジワジワと追い詰めてくる。お腹が熱くてたまらない。知らない自分が、目覚めさせられていく。一方的な掌から逃れようとどんなに身体をよじっても、不埒者の掌も唇も、少しも身体から離れてはくれない。自分の行動も身体の事も、何もかもが男の掌の中にあるようにさえ思えてくる。
ようやく乳房が解放されるとホッとする間もなく、今度は両脚を持ち上げられて、天井に向かって思いきり開脚させられた。

「あっ……脚…!!」
（……！　こ、今度は、何を……!?）
ただでさえ色の透けたタイツの股間が、これ見よがしに強調される。腰骨の肉にも引き延ばされて、股布がピリピリと引き裂かれていく。
「ひっ――！」
突然、尻頬の内側に男の掌が添えられた。
（そっ……そんなところ……っ！）
肛門付近を指先でくすぐられ、尻布を左右に引きちぎられると、僅かに空けられた破け穴から少女姫の処女肛門が露わにされてしまった。狭い布穴を食い入るように、会場中の目が、ジィッと一点に集中する。
「う……ふくくっっ…！」
あまりの恥ずかしさに上気した顔を背け、それでも悲鳴を上げるような恥だけは晒すまいと、格闘少女は必死に目をつむって耐えた。今まで戦ってきた強者達の、名誉のために。
（こ、こんな、ところを……見られる、なんて……）
あまり受けた事のない光を受けた清楚な窄まりは、色素の沈殿がほとんど見られず、しっとりと、やや濃い桜色を浮かべている。小さくキュッッと締められた数本の皺が少女姫の健気さまでも表している様だ。

「おおっ！　姫様の肛門だ！」
「綺麗な色してるなぁ」
「しかも小さくて形もいいよな！」
大勢の視線を感じるのか、恥ずかしそうに、不規則にピクピクと震えを見せている。
（わ、私は……こんな事、では――んふっっ……ぅ‼）
肛門左右の指先に力が込められ、ぷにゅうっと左右に広げられた。
皺が消える程縦長にされたり、上下によじられたりと、自分でも見た事のない場所の、普通ではあり得ない表情まで作られて、遊ばれている。クチクチと耳を打つ小さな音に少女の羞恥は更に追い打ちを掛けられていく。
「こちらも随分と熱をお持ちのようで。姫様の身体は好奇心が旺盛だ」
「なっ……！　何という、ぶじょ――んうぅっっ！」
（いや、やめて下さい！　そんなところ、さ、さわらないで…っ‼）
男の指で、くりゅくりゅと媚肛を撫でられた。用足し後やお風呂などの洗浄時以外触れる事のない場所である。強烈な羞恥と未知の感触で、頭が一気に混乱させられる。
尻頬の内側をさすりながら、指がスリリと内股に向かい、無数の小穴が空けられた股布に指が掛けられた。ゆっくりと左右に引き伸ばされていくと、プチプチと小穴が広げられて、少女姫の自尊心がジクジクと削り取られていく。

「や、やめて下さい！　もうこんなの、試合ではないでしょう……!!」
しかし姫の言葉は無視されて、男の指で布を引き裂かれ、次第に露わにされてゆく少女の秘処。会場中の男達が一瞬でも見逃すまいと、静かな荒息を上げて注視している。
隻眼男の指が止まると、残された僅か数本の細い布だけが、一際濃い桜色に彩られた処女のひとすじを健気にも隠そうとしていた。
「う……っ！　こ、こんな……ことっっっ!!」
信じられない羞恥を、少女は歯を食いしばって必死に耐えた。
「ほぉ……姫様は産毛も生えてない、無毛の丘をお持ちでしたか」
「き……聞こえ、ません……っっ!!」
晒されてしまった。誰にも見せた事のない秘密の場所も、密かに劣等感を抱いていた、毛穴すらない処女の丘も。鋼鉄の様だと思っていた自尊心の板に、大きな穴が空けられていく。羞恥、怒り、恥辱、劣等感、様々な感情に少女の身が灼かれていく。
少女の身体を陵辱する指が、ピッタリと閉じられた処女の媚唇を左右からプニプニと触れてきた。小穴から押し出された柔らかい媚肉が、楽しげに押してくる男の指をプルンと押し戻す。
自身だけの秘すべき箇所を、失礼な男の手で好き勝手に弄ばれている。その信じられない現実の羞恥から、格闘少女は一刻も早く逃れたかった。

「ひく――っっ！　そ、そんな、ところぉ……触ら、ないで……!!」
「それは敗北宣言ですか？　ハハ……強いお姫様には不似合いですよ？」
少女姫に言葉を返した青衣の闘士は楽しそうに微笑んでいる。
くちり、と、僅かな湿りけを帯びて、ついに処女姫の媚溝が開かれた。どこまで目がいいのか、全ての観客が食い入る様に、姫様の秘処を凝視している。
「～～～～っっ……!!」
初めて光を受けた姫の秘唇は、朱色に近い艶めく桜色に身を染めていた。開かれた上端で包皮に隠れている小さな肉芽も、初めて知らされた外の世界に怯えるように、ふるふるとわなないている。
「見えたぜ！　お姫様のま〇こだ」
「おま〇こも肛門も、綺麗なモンじゃねぇか」
会場の声が少女の耳をつき、心が羞恥の炎で灼かれていく。
やや下に位置している針穴の様な極小の尿口。更にその下で口を閉ざす、最奥へと続く処女の秘孔も、鮮やかな処女色を放ちながらも浴びせられた光に戸惑っているようだ。
今まで全てを包んでいた極薄の柔肉花びらは、初めて掛けられた外側への力にも負けず、整った形を崩す事なく、ぴたりと元通りに閉じようとしている。
ただ、うっすらと浮かべられた透明な液艶は、少女の身体が未知の目覚めを受け入れつ

つある事を示していた。心臓がトクトクと高鳴り、処女格闘姫の羞恥は既に限界を迎えている。

「では姫様。そろそろ愛らしき姫君の、地獄の扉を開きましょう」

「じ、地獄の――ふぅっっ！　こ、このうえ何を――ひあぁぁっっっ!!」

いきなり包皮の根本を押されて、敏感な肉芽が根本まで露出させられた。蜜に濡らされ、刺激を甘受しやすくなった小さな媚芽は、それだけで処女姫の肢体を跳ねさせる程の衝撃を受ける。

格闘少女が意識した事もない、身体の中の、ほんの小さな一処。なのに男性に触れられただけでビクリと全身が反応して、視界のあちこちが白光した。身体が蕩かされ、力が奪われてしまうような、強くて甘美すぎる、未知な快楽。

愛する殿方の腕の中でなら、きっと自分の全てが染められてしまう程の、甘い天国。それをもし今、この場でこの男に与えられてしまったら、自分は――。

「い、いや……！　やめて、ください……っっっ…！」

男が言った「女の地獄」――。少女姫が何よりも恐れているのは、拒む理性に対して、戸惑いながらも受け入れ始めている自身の身体だった。男は小さな笑みをこぼして、格闘少女の身体を更に責め立てていく。

両の親指に肉芽を挟まれ、小指にはお尻の媚肛を突かれる。人差し指には尿口を広げら

れ、中指で左右にある極薄の柔粘膜をさすり回されて、薬指には処女の媚孔をこねられる。
更に処女の秘処全てに当てられた指が、小刻みに振動して格闘処女を追い詰めていく。
「やっ、やああぁっっ！　あそこぉっ！　いやはっ、いやですうっっ‼」
下腹部全体からつま先へ、豊かな胸の先端や大きな瞳、そして頭の先にまで、強烈な快楽の波が押し寄せ続ける。乱された気が淫らに染められ、黒い淫気となって身体中をメチャクチャに駆け巡っていく。
溢れる恥蜜が男の指を濡らし、ちゅぷちゅぷと淫らな音を会場中に響かせる。弾む身体に合わせて、豊かな柔乳や硬化した媚突がフルフルと上下に長い円を描いて揺れる。
「か、身体ぁっっ！　私のっ――身体、ぜんぶぅ……熱いぃぃ……っっ‼」
快楽に染められてしまう。未知の恐怖で処女姫は半狂乱のように藻掻いた。大きく見開かれた瞳からは無意識にポロポロと羞恥の涙がこぼれ落ちる。
身体の上でトゲのついた小さな植物の種を転がされるような、チリチリとした快楽の電流が、ピリピリとした淫楽の電撃になり、ビリビリと身を灼く甘媚な衝撃へと、どうしようもなく変えられていく。
「もぉ…っっ、燃えちゃうっっ！　からだぁっっ、燃えちゃうぅぅっっっ‼」
痴態を見られている事も、守りたかった強者達の名誉も、主を心配する愛犬の吠え声すらも、追い込まれてしまった今の少女には、どうする事もできない。

『第四章　武闘少女姫　散華』より

「ほぉら、姫様ご自慢の格闘『ゴッコ』で、早く俺様をやっつけてくれよぉ、ハッハァ」
「お、おやめな……無礼な――ぅっっ！」
少女姫の上気した頬に、巨人の巨立が布越しで押しつけられた。長い髪を根本で捕まれ、顔を引き離す事もできない。
（か、顔に……汚い…！　熱ぃっ……！）
武闘少女は未知の恐怖を感じていた。布越しなのに、男性器は硬さと弾力、火傷しそうな熱さを以て、絶対的な存在感を少女の脳裏に刻みつけてくるのだ。
女の本能なのだろうか、突きつけられるだけで心が萎縮させられて、甘美で屈辱的な服従心が首をもたげ、理性が、屈服させられていく。
「お、お離し、なさいっ……顔から――んぅ!!」
（あくっ……！　こ、このにおいは……！）
イカと獣脂の混じったような、姫の知らない臭いが鼻をついた。男性器が放つ、男の性臭である。その途端、達せられたばかりの胎内が、じゅくんっと跳ねる。男がゴソゴソと腰を動かし中身を飛び出させた。
「…!!　きゃぁ……っ!!」
視界に入った瞬間は何だか解らなかった。赤黒い大蛇の様な、しかし見た事もない物体。ビクンと跳ねて、それが巨人の男性器だと解った瞬間、少女姫は悲鳴と同時に息を呑んだ。

幼子達の幼性器とは、全く別の生命体。牡本能の全てをがさつに体現した様な、力任せの荒々しい姿。女性の身体には決して存在しない、女体に攻め込んでくるためだけに意義を持つ器官。初めて見せつけられた処女姫にとっては、暴力以外の何ものでもなかった。

病巣を思わせる赤黒色の大蛇に、糸ミミズの様な血管が絡みついている。こんなものを女性の身体が受け入れるなんて、絶対に信じられない。

（う…うそ……）

それなのに、嗅いだ事のない臭いにあてられ、硬化した巨棒を見せつけられると、目覚め始めた女の性本能は敏感に反応をした。不潔にしか見えない醜悪な姿なのに、お腹の奥深くがジワッと熱を上げて、くノ一風少女の全身が再びキラキラと汗を纏う。

（ど、どうして……こんな……!?）

胎内と頬からの淫熱に脳が灼かれ、泣きそうな瞳が自然と潤む。熱い肉刀を眉間にまで押しつけられると、男性器に対する反抗心までもが、ガリガリと削られていく。少女の潔癖な理性に反し、身体は熱くて堅い刺激を求めて、ネットリと身をよじらせ始めた。

「くわえろ、お姫様」

「そ、そんな……いやで――むぐぅっっ!!」

口を開けた瞬間、新生児の掌程もある太い剛直肉が少女姫の小さな唇を割り、舌に擦りつけられ、上顎を撫でながら、いきなり喉の奥までねじ込まれた。嫌悪の実体でしかない

醜肉に、我が物顔で口腔内を占拠されて、少女姫は目が白黒するほど混乱させられる。
「んんっ！　んぐぷっ～～～!!」
（いやぁっ！　き、汚いぃっ!!）
ただ反射的に、異物を吐き出そうと意識が抵抗をする。そんな反応を楽しむように、不埒な巨人は獲物の頭をグリグリと動かした。穢れを知らない少女の口内全処に、男性器の熱や形、太さや長さ、味や触感までもが、鮮明に記憶させられる。
（く、口の中が、熱い……臭い……苦いよぉ……！）
口の中が縦横無尽に穢される。もう一生落ちない汚れをつけられてしまったような絶望感が、シミとなって少女の心に広がっていく。
その一方で、男性器の熱い存在が少女口全体に刻み込まれると、格闘少女の理性に反して身体は完全に抵抗をやめてしまった。
（……!?　か、身体が……離れ、ない……!!）
自分の身体が、自分の意思に逆らっている。品性下劣な男の不浄な性器を、無理矢理含まされているというのに、唇が、舌が、淫肉に絡みついて、拙いながらもネットリと味わい始めている。
自分では止める事のできない女の身体。スピットの言った「女の地獄」が、頭を過ぎる。
（やめて……もう、口……お腹が、熱い……）

待ちわびていた誕生日プレゼントをようやく貰えた子供のように、身体は男性器を無邪気な喜びで迎える。少女姫の瞳が、羞恥と悔しさの色に染まる。

陵辱者の剛肉を唇が包み締め、口の中の臭気を呑み込んで、口内の全てで太肉を味わう。太幹は男性の腕の様にややザラついているのに、先端の膨らみは赤ちゃんの頬の様にツルツルすべすべとしている。舌が勝手に男性器を舐め上げて、美味しいとさえ感じてしまう。直接的な臭いと味、口内の感触に、思考が急速に封じられていく。

（い、いや……こんなの、やめ、てぇ……）

処女姫の瞳がしっとりと潤む。女の本能が、自身の頭部を剛直に沿ってにゅるにゅると前後させる。男が黒髪から掌を離しても、姫は全く気付かなかった。

胎内からの淫熱に操られ、小さな口いっぱいにペニスを味わう。何度も往復を繰り返して、処女の身体が、男性器に慣らされていく。

ちゃぷ、ぷちゅく、るちゅ、

（……た……たす、けて……）

屈辱的な口淫奉仕を、甘美な疼きに感じ始めた身体が怖い。熱棒の先端からしみ出た苦い液体に、少女の眉が苦しげに歪んだ。それでも、舌が勝手に鈴口をヌルリと舐め上げると、舌の先端に薄いぬめりと熱い肉割れの感触を感じる。

（……舌が……熱い……）

厚い皮でもはち切れそうな亀頭の形と弾力に、腰がモジモジと動き、処女の秘唇が再び蜜をこぼし始める。
「もっと舌を使って全体を舐めろ」
「……は…はぃ…れろ……」
自然に返事をしていた事に、少女自身が驚愕した。身体だけでなく心までが、不埒な巨人に屈しかけている。男の命令に身体が従い、男性器を包む自らの唾液を、舌を使って丁寧に舐め取る。
唾液と性臭の混ざった臭いに鼻をつかれ、脳裏が淫色に染め上げられると、屈していく心さえも、理不尽な快楽となって子宮を蕩かす。乱れる息と、れろれろりゅぷりゅぷと淫らに響く音が、舌の動きを更にネットリと丹念にさせていく。
淫らな巨人に跪き、破られた衣装の胸を押さえ、命じられるままに口唇奉仕を続ける少女姫。拙いながらも淫らな奉仕の姿に、観客達は背徳感でゾクリと震えた。
「もう一度言うぜ。所詮女なんざ、男に服従して尻でも振って、身体で尽くしてりゃあ、それでいいんだよ！　ハッハッハ！」
（…うぅ……）
悔しいのに、反論ができない。淫らに身体をくねらせ、ウットリと瞳を蕩けさせ、胎内の淫熱に闘志を押し潰されて、男に服従し男性器に口で奉仕をしている自分。

品性のカケラもない男に、見下され、バカにされて、それでも男性器をくちゅりくちゅりと味わう事をやめない、自分自身の身体。男の言葉を肯定し、自ら女性の尊厳を踏みにじる様な恥知らずな行為に、自尊心の板がメキメキとねじ切られていく。

（口が…とまらない……だれか…とめてぇ……！）

罵られる行為も、姫を見下す観客達の視線も、下品な笑い声にさえも、少女の子宮は淫熱を上げて順応していく。

「へへ、そろそろくれてやろうか。男が女に与える敗北の味だ、ありがたく味わいな！」

巨人の掌に頭を押さえられた次の瞬間、口内の堅肉が一回り大きく膨らみ、ジワッと熱を上げた。

「んんっ⁉」

肉棒の変化に驚いていると、いきなり口の中が何かで満たされた。

ビシュウウウゥゥゥッッ！　ぶじゅるっ！　びゅぶぶぶぶぶぅぅっっ‼

喉を叩く生熱い液体。ドロリとした感触のすぐ後に、まずい塩の様な苦みが口いっぱいに広がる。口内から喉、鼻孔へと、顔の内部が汚臭で染められる。動物の脂を濃縮したような、吐き気を催す、熱い粘液。食事以外受け付けた事のない少女姫の口内に、初めて射精が味わわされた。

「ん…んばっっ！　やぶ、やべて――げほっ、やめれ――んぐん～～～っっ‼」

むせ返りせき込み、一刻も早く牡毒から逃れようと藻掻く、落ち葉色の髪の処女姫。むき出しにされた乳房を隠す事も忘れ、男の腰に両手を当てて押し離そうとする。しかし巨人の怪力で、尚もビュルッビュブブッと断続的に射精を続ける剛直を更に喉の奥へと差し込まれた。ふるふると揺れる豊かな双乳に、観客達の目が釘付けになる。

姫の唇からは白濁した汚液がぶくぶくと溢れ出し、布に包まれた乳房と露出した乳房、双つの豊かな柔乳を穢す。食道の栓をこじ開けられて、胃の中にまで流し込まれると、男の汚液だけで、胃が満たされてゆくのが解る。

「んぐっ……んんんっっ！」

（やめ、やめて！　しんじゃうぅ……！）

止めどなく流れる臭い粘液が喉を占拠して、息ができない。口内の淫熱と脂臭い汚臭に脳裏が灼かれ、混乱していく。

「へへ、初めてにしちゃあ、結構飲めたじゃねぇか、お姫さんよ」

放尿の様な長い射精が終わり、ようやく身体が解放されると、格闘少女は崩れた四つん這いで巨人に背を向けてせき込んだ。嗚咽が上がると自身の口から精液のにおいがして、あまりの気持ち悪さに胃が痙攣する。まるで胃の中が地獄になってしまったかの様だ。

「こほっ、かはっっ……こほっっ!!」

（うぅ……き、きもち…わるぃ……）

『第七章　永遠の淫獄迷宮へ』より

（ベロベロして……はぅ…気持ち悪いのにぃっ……あは……気持ちいぃ……っっ!!）

大きく脚を開かれたまま、艶めく無毛の丘とその下で息づく濡れた秘唇が、犬の唾液で衣装に色を浮かせ始める。

左右に割られた処女色の薄い淫唇や、上端の包皮から顔を覗かせる硬化した小さな媚肉真珠、針穴のような尿口や、ひくひくと収縮する狭い膣口、更にその下で同じ様に蠢く色素の薄い媚肛までもが、容赦のない犬の熱い舌に責められ続けた。

「あはああぁぁっっ！　あそこ…お尻も……熱くてぇ……っっ！　これじゃ、身体が燃えて、またイっちゃ――あくぅっ…とけちゃうぅっ!!」

休む間もなく、犬達に胸の先端や秘処全体を力強くこね回されて、子宮から背筋の神経、脳の中心までもが、惨めな快楽でビリビリと灼かれていく。空気を求めるように差し出された舌に、リーダー犬の舌が絡みついてきた。

「んむ……ぷひゃ…！　やらぁっっ！　くひゃくてあるいの……やら――むぷぅ……！」

（いっ……！　犬の、舌ぁ……!!）

朱い唇を割って、口いっぱいに犬の舌を差し込まれる。生肉のようなニオイに口内を占拠されて、気が狂いそうな程の汚辱感に少女の心が傷つけられていく。

それなのに身体は快楽の虜となり、熱い舌を口いっぱいに頬張り、自らの舌と絡ませ合って、狂犬との舌愛撫で喜びに震える。

それぞれ両腕を押さえる犬に、色が透けて巨大な白玉のようになった丸くて真っ白な乳房を舐められると、それまで媚突を転がしていた犬には新たに縦長のへそを狙われた。

（くふぅ……！　お、おなか、くすぐったいぃ……っっ!!）

唇や両乳房の先端、くすぐったいおへそ、敏感な肉突や尿口、膣口や肛門、全ての性器官が刺激を受けて、少女の身体は急速に重力感を失っていく。犬達に、身体が性快楽の頂点へと、押し上げられようとしているのだ。

「ぃやぁ…っ！　嫌ですぅ――はふぅっっ！　そんなの、いやですうぅぅっっ!!」

望まぬ恥態を犬達によって晒される。拒絶する少女姫の理性を無視して、身体は犬に押しつけるようにのたうち、唇はジュルズチュと犬の舌を吸い続ける。

舌を絡ませるリーダー犬が姫の頭にペニスを押し当てた。人間の男性器よりも熱く、表面の柔らかい陰茎を擦りつけ始めると、両の掌に、敏感なヒザに、それぞれの犬達もペニスを擦りつけ快楽を貪り出した。特に弱い脇腹までが熱い獣茎でくすぐられると、当てられた犬茎の全ての感触が身体に刻み込まれて、少女の理性は急速に白一色にされていく。

犬のペニスを覚えさせられるという自己破壊的な性快楽に、酔っていく身体が止められない。全ての舌や獣茎で、同時に力強く性感帯を刺激された瞬間、脳が強力に閃光した。

「んふぅ――っっっ!!　イく…っ！　イっちゃうぅっっ!!　犬にっ、イヌに、ひどい事されてぇっ！　こんなのっ、やなのにひっ！　イっちゃうぅぅっっっっ!!」

異常な性の快楽は衝撃となって、少女姫を未知の頂点へと跳ね飛ばしながら、心と理性を引き裂いていく。あまりの快感に、仰向けに押さえつけられた身体が桜色に染まり、頭と踵と両ひじだけで全身が橋のように仰け反った。浮いた背中が固く締まり、お尻や腿の筋肉までが硬直する。

ガヒュンッッ！　ハフッハフッッ‼

同時に身体上で快楽を貪る狂犬達も、甲高い声と共に溜め込まれた精を一斉に放出した。

ビュルるるっっっ！　ドブブッぶぷっッ！

プジュじゅジュウうぅウゥッッ！　ブビュぷびゅぶゥウッッッ‼

紫を纏った桜色の少女橋の上に、人間よりも熱い獣の精液がドパドパと流し掛けられていく。茶黒色の美しい長髪に、白魚の様な綺麗な指に、胸の丸い肉餅やその先端に、縦長のおへそや脇腹、ヒザから腿、ツルツルの下腹部まで、まるで全身が包み込まれるかの様に、少女は犬の射精を受け続けた。

「あぁ……いっぱい……掛けられ……はふぅ……‼」

人のものより色もトロみも薄い犬の精液は、呆気なく布に吸い込まれる。多量の水分を含んで透けた衣装は、少女の肢体にみっちゅりと張りついて肉体に引っ張られた。

キシキシと痙攣を繰り返した身体が脱力し、パタリと武闘台の床に落ちる。ゆっくりと意識が戻ってくると、荒く息を吐く少女の瞳から、一際大粒の涙がこぼれ落ちた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/